

剣道における礼法の意味

The Meaning of Etiquette in Kendo

1J02C169 - 1 寺田有希

指導教員 主査 志々田文明 先生 副査 矢野尊之 先生

はじめに

礼儀作法は、近代以降の剣道分野において非常に重視されてきた。礼儀作法は、剣道を教育する上であたかも表看板のように重視されてきたが、現在、その礼儀作法が疎かにされ乱れている。「剣道は立派である」「剣道は他のスポーツと違う」と言うことを先人から伝えられているが、そのような流れのなかで、乱れている礼法（礼の作法、礼儀）や作法（事を行う方法、起居、動作の正しい方式）などの精神面を改めて見直す必要があると私は考える。しかし、礼法がどのような意味で剣道にとって重要なものであるのかについては、筆者自身明確に理解しているわけではない。必ずしも明らかではない。

本研究の目的は、まず（課題１）剣道における礼法の意義を考察し、次に（課題２）礼法や作法の歴史を剣道との関わりで検討する。以上から（課題３）現代剣道で行われている礼法について、改めて考察する。

一章 剣道の礼法の意義と特徴

現代、剣道が行われるのは、体育の価値があるとともに剣道精神が現代社会にも要求されているからである。しかし、剣道の伝統は武士生活を前提として考えなければならない。剣道は、古来、武士の間に武道として発達した。戦後、剣道は学校養育から追放されることになるが、一度禁止された剣道が復活したということは、体力的、社会的、精神的にそれぞれの価値があったといえる。

二章 剣道礼法の歴史

仏教が伝来した 552 年に様々な礼法が入ってきたことから始まり、平安から鎌倉にかけて禅宗の茶道の影響を受け、それが貴族から武家社会に広まり、千利休などによる茶道の完成によってその礼儀作法もまた武家社会に影響を及ぼしていった。そして、剣道（武道）の礼儀作法は、室町時代に「武家礼法」として完成された。室町時代の武家社会では、礼法は戦だけでなく日常生活にも強い結びつきが合った。武士の礼は、武道そのものが礼である「武即礼」といわれた。当時は、礼法を学ぶことによって武士の守るべき秩序や道徳が身につくように整理されていた。

三章 剣道の礼儀と作法

現代、剣道（武道）は、戦前、戦後を問わず、礼法を重視している。ただ、戦前の礼法の意味は、武士道精神の啓培や、階級性や権威主義といったところにあり、戦後はスポーツとしてとらえ、

民主主義的な考えで礼法を把握してきたところにある。剣道の礼法には護身を踏まえた礼法が多く見られる。このような礼法は、武道を知らない者には自分の心が素直に伝わらない可能性がある。筆者は、護身を踏まえた礼法は武道の中の礼法であるからそのままの形で残して武士の心構えも教えていくようにし、剣道の中で行われている礼法では、護身の考えを抜きに、「相手を敬う」という一般的に行われている礼法を教え、剣道における礼法が一般の社会でも通用するといった形をとったほうが良いと考える。

四章 剣道における礼法の意味

学校教育において剣道（武道）が必修科目として重視されている理由は、剣道に他の運動種目にはない、礼法や作法といった生理的・精神的要素と、伝統文化と言われている文化的要素が剣道に含まれているからである。剣道にお互いを敬う礼がなければただの叩き合いである。礼を重んじ、豊かな心で、相手を尊敬して稽古を行う。剣道における礼儀作法を確立して、礼儀作法の指導を徹底することによって、現代もっとも欠けているといわれている人間らしい感情を取り戻すことができるであろう。剣道における礼儀作法の確立を、真剣にしかも早急に取り組まなければならない。

結論

課題１、２については上で要約したので、ここでは主要な課題である３について述べる。世の中の動きにつれて、日本もどんどん変わっている。変わっていくもののうち、日本や日本人の本質さえ変えてしまうものもあるように思う。しかし、いくら変わろうとも人間としての尊厳を失うようなことになってはいけな。日本は、僅かな年月で良くない方向に変化しているのではないかと考える。剣道の礼法や作法における、「物を大切に」とか「思いやりのある」という教育は、人間が求めている「自然を大切に」とか「思いやりをもって人に接する」といった目標に繋がっている。剣道を取り上げて行くうえで、日本の現状を考える一方、今日本が世界の国々から求められている立場を、広い視野に立って考えていかなければならない。剣道教育がこういったことに気を配りながら行われてこそ、国を救い、日本の国際化にも大きく貢献する視野の広い、今時代が最も求めている教育となっていくのではないだろうか。